

令和6年度

たけはら男女共同参画 セミナー

日時

11/28(木)
13:30~15:00

「かわいって、ほめ言葉なの？」
～日常から考えるジェンダー問題の現在～

報告書

講師



県立広島大学
地域基盤研究機構 教授

かみづる ひさひこ
上水流 久彦 さん

プロフィール

2001年 広島大学大学院博士課程後期修了、博士(学術)
2003年 県立広島女子大学助手、以後、県立広島大学助手、助教、講師、准教授を経て、2020年4月より現職
専門は文化人類学
三原市と女性活躍をテーマに調査研究を行う
広島県男女共同参画審議会委員



日本の
現実



「大環境（土壌、構造）を変えるために」について、5つのグループにわかれ、トピックごとに意見を出し合い、発表後に上水流先生の講義を聞くワークショップ形式で行われました。

この講座で気づき、考えたいこと

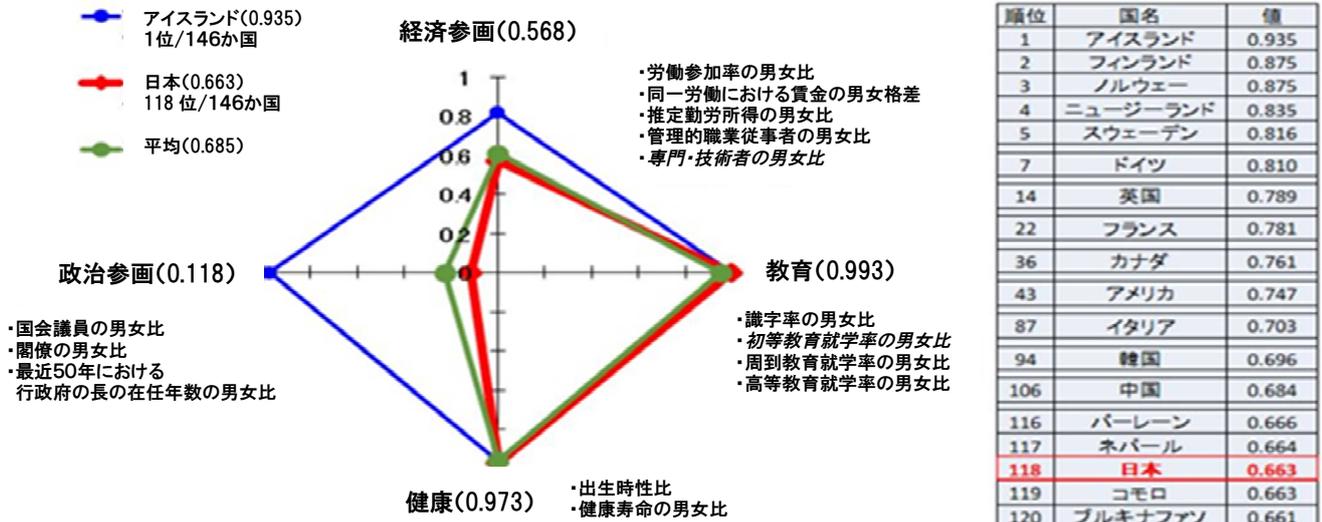
- ①繰り返していること、見ていることが、「当たり前なこと」になる、この現状を知っていますか。
- ②「無意識の男性中心社会」に気づけていますか。
- ③一人ひとりを「個」ではなく、「性」で決めつけていませんか。



日本の現状を知ろう ～「ジェンダー・ギャップ指数」日本は146か国中118位～

ジェンダー・ギャップ指数(GGI) 2024年

- ・スイスの非営利財団「世界経済フォーラム」が公表。男性に対する女性の割合(女性の数値/男性の数値)を示しており、**0が完全不平等、1が完全平等となり、1に近いほど順位が高いとされている。**
- ・日本は146か国中118位。「教育」と「健康」の値は世界トップクラスだが、「政治」と「経済」の値が低い。



〔備考〕1. 世界経済フォーラム「グローバル・ジェンダーギャップ報告書(2024)」より作成
2. 日本の数値がカウントされていない項目はイタリックで記載
3. 分野別の順位: **経済(120位)**、**教育(72位)**、**健康(58位)**、**政治(113位)**

出典:内閣府男女共同参画局
https://www.gender.go.jp/international/int_syogaikoku/int_shihy

ジェンダーギャップ指数とは

世界経済フォーラムが毎年発表している世界におけるジェンダー格差指数です。各国を対象に、政治・経済・教育・健康の4部門について、男女の間にどれだけの格差が存在しているかを分析してスコア化し、各国のジェンダー平等の達成度について順位をつけています。

数字の見方

指数は男性に対する女性の割合(女性/男性)で示しています。
平等なら1、完全な不平等は0です。1に近いほど、男女間の格差が小さいということになります。
(もし、その国の閣僚の20%が女性であれば、女性/男性=20/80=0.25 となります。)

日本の状況

日本は、2006年の指数0.645に比べると、2024年は0.663と、わずかながらに改善しています。しかし、世界における順位は、80位から118位に下落しています。これは、他の国が改善するスピードに比べ、日本の男女格差の状況はほとんど変わらないため、その結果、他の国に追い抜かれ、順位を下げていくのです。

特に、女性の「政治参画」において、ジェンダーギャップ指数は、0.118と、大変低くなっています。

【いろいろな分野への女性の参画を阻害している要因の一つとして】

こどもたちの多くは、家で両親の姿を見て影響を受けます。家庭の中で、性別による固定的な役割分担が常態化していると、それを当たり前として受け止めるようになります。

学校でも、学級委員長が男性、書記が女性、といった状況を繰り返していると、いつのまにか、それが当たり前のように考えるようになってしまうのです。



「大環境」を変えるために次のトピック についてグループ討議を行いました。

問1 女性だけが進学する学校は必要か、必要ないか。

「多感な時期であり、女性だけで学びたいと言う人もいるだろうから必要だ」、「昔は時代背景もあり女性が家政科などの学校に通う必要性もあったかもしれないが、今は性別にしばられる必要性がないから不要だ」といった意見がありました。

 男女共学であると、女性のリーダーが育ちにくい傾向があります。反対に、女子中や女子高では、女性がリーダーとして活躍する機会や場面があり、リーダーの素養は育ちやすくなります。

女子大学を卒業した女性が、社会に出て働くようになり、あまりにも男性中心な社会の中で、女性がリーダーシップをとるための経験を積む場所がないことに、がく然としたといった話も聞かれます。

問2 なぜ多くの男性が家事を「手伝う」と言うのか。どうすれば「手伝う」というレベルを脱すると思うか。

「いったん、全部の家事を一人でやってもらったらいいのではないか」との意見がありました。

 仕事と同じように、家事についても全体を見渡すこと、全体を知ることが大切です。

例えば、お弁当づくりは家事の花形？！ですが、お弁当を作る前に、材料はあるか、調味料はきれていないかなどを確認し、買い足したりするところから始まります。家事の一部だけを見るのではなく、全体を見ることによって、自分から計画的に動こうとする意識が出てくるのではないのでしょうか。

また、家族間でコミュニケーションをとることも大切です。話し合いをして、情報を共有し、状況をよく把握していることも、主体的に考え、行動するための大切なポイントとなります。

問3 女性の管理職を30パーセントにするという数値目標に賛成か、反対か。

賛成する人が多い中、「個人に能力があり管理職になる人を30%になるよう、環境作りなどを進めるという意味で数値目標を掲げることに賛成だが、30%の数値目標を達成するために能力に関係なく女性を管理職にすることには反対だ」といった意見がありました。

 全体の中で、30%を占める集団があると、その集団は影響力を持つことができる、無視できない、とされています。

日本は、男女雇用機会均等法以降も女性の登用状況は変わっていません。なぜ、変わらないのでしょうか。どうしたら変わるのでしょうか。

女性だからではなく、個人として能力があるから管理職になる、との考えは、そのとおりです。

しかし、その前に「男性は下駄をはかせてもらっている」ということを知らなければなりません。

多くの男性は仕事だけに集中し、多くの女性は仕事も家事も育児もしている。そのような状況は、男性に有利であることを知っておかなければいけません。数値目標は、いつまでも変わらない日本の現状を変えるための有効な手段となります。

問4 以下のいずれが良いか。

- ① 男性教員が女性の大学生のファッションをほめる。
- ② 女性教員が女性の大学生のファッションをほめる。
- ③ 男性の大学生が女性の大学生のファッションをほめる。
- ④ 女性の大学生が女性の大学生のファッションをほめる。

男性教員が女性の大学生のファッションをほめるのは、セクハラが疑われるため良くない、との意見が多数でした。その他については、反応はさまざまでした。

💡 誰から誰へのほめ言葉であっても、外見へのほめ言葉は、相手に、外見を気にすることを意識させてしまうことにつながります。

大学は、本来学ぶための場です。外見を美しくすることが、本来の目的ではありません。

あえてほめない、のは、相手に対し、「ほめられることを気にしないでいい。外見以外のことを気にしてほしい」というメッセージでもあります。「かわいい」とほめる(ほめられる)行為が、無意識のジェンダー慣行、慣習につながっているかもしれません。

問5 地下鉄における女性専用車両は、混雑時必要か。

ほとんどの方が必要と答えられました。反対の方は、「専用車両を設けない方が、混雑時に車両を有効に活用できるから」との意見でした。

💡 女性専用車両は、被害防止については即効性がありますが、一時的な対処法でしかありません。

これって、いつまで続けますか？

問題の根っこは、女性を粗末に考えていることです。人権意識の問題なのです。ここが変わらなければ、状況は変わっていきません。相手を軽視しない、互いを尊重する、そのような社会を築いていくためにも、わたしたちの意識改革が問われているのではないのでしょうか。

男性と女性の生きづらさは違います。男性は養うことやリーダーシップを求められる傾向があり、女性は「働かなくてもいい」、「県外の大学には行かなくていい」と望むことができないケースがみられます。男性と女性の困難さを一緒にしてはいけません。

自分のような男性が声を上げると、じゃあお前はどうか、できているのか、と言われてしまうかもしれません。けれど、できている、できていないに関わらず、今ある男女格差の状況を変えていくためには、男性こそ声をあげていきましょう。



【参加者の感想】

- *ジェンダーギャップ指数が、数値は増えているが、順位は下がっているというところから危機感を感じました。
- *家事の手伝いに関するグループワークの中で、異なる世代間の家事への関わり方が「手伝い」から「分担」に変遷している様子が感じられて興味深かった。
- *グループディスカッション等を通じて自身の考えを整理するとともに学術的な見解も知ることができて良かった。
- *男女フラットな感覚がベースになっていて、違和感がない。理想と現実のギャップを埋めようと思えばならないと思った。
- *日常生活におけるジェンダー問題について、具体的な事例を交えてわかりやすく説明いただいたので理解が深まった。
- *様々な理由が入り組んでいて、とても難しいと感じた。